実践女子大学 実践女子大学短期大学部

下田歌子記念女性総合研究所 ニューズレター

No.14
2020年2月

下田歌子の故郷岩村藩と丸善のことなど

第1部門　客員研究員
小林　修

先日（11月30日）奈良女子大学で開催された日本出版学会に出席した後、京都の「府立京都学・歴彩館」で吉井勇関係資料・小林天民関係資料などの調査をして来ました。いずれも仲間と行なっている共同研究に関わるものです。その機会に、ちょうど京都丸善で開催されている「梶井基次郎と〝神隠し〟の京都展」を見て来ました。これは丸善150周年・実践女子学園120周年・実践国文100周年を記念して、本学と京都市・丸善の共催で開催されたもので、本学所蔵の梶井基次郎「檸檬」の幻の草稿（「瀬山の話」）を作品所縁の丸善京都本店において展示するという記念すべきイベントでした。私が訪れたのは12月1日の日曜日でしたが、この日は国文の河野龍也教授が来店しギャラリートークをするという日でもありました。多くの梶井フアンの市民が河野さんの明晰で丁寧な説明に熱心に聞き入っていました。私も梶井の幻の原稿が本学の所蔵するところとなり、それが丸善という所縁のトポスで展示され、しかも本学120周年・丸善150周年という大きな節目の年であることを思い、格別に印象深い1日となりました。それは本学と丸善とのもう一つの奇しき因縁を想い浮かべていたからでもあります。ここでは、そのことについて簡単に紹介したいと思います。

学祖下田歌子は美濃岩村藩の出身であることは既に周知のことですが、丸善創始者の早矢仕有的も実は岩村藩領の出身でありました。安政6年に江戸に出た早矢仕は医師としていろいろな修業の後、師である二代目坪井信道の推薦により、岩村藩お抱医師となります。しかし、明治2年5月には「病気に付内願」して「御暇」を申し出て許可されています。思うに明治維新を機に藩主松平乗命は岩村に帰り、有的は丸屋商社の創立に奔走していたからだと思われます。ところが、この裏にはもう一人の岩村藩士の存在が関わっていたと私は考えています。そしてそこには明治維新という歴史的転換期に徳川家親藩である美濃岩村藩という小藩が置かれた困難な状況が大きく作用していたと思われます。鳥羽伏見の敗戦の後、江戸に逃げ帰った徳川慶喜に対して新政府による慶喜追討軍が東上し、沿道諸藩に勤王恭順を迫ったのですが、岩村藩の藩主松平乗命は江戸在府のままであり、しかも幕府陸軍奉行を勤めていました。江戸家老沢井市郎兵衛と秀造父子は藩主を補佐し、藩主の命により早くから洋式軍制を学んでいました。特に沢井秀造は、洋学・製図・科学を学び、坪井信道に医学を、江川太郎左衛門に洋式兵学を学んだ新進の知識人でした。ただし結核を病み、藩医早矢仕有的の屋敷に滞在療養していたこともありました。

そうした中で、明治維新を迎えたのですが、国元岩村と江戸では急激な政治的転換期に対する認識に温度差が激しく、岩村では藩主不在のまま、何とか藩論を勤王恭順に統一（下田歌子の父平尾錂蔵は勤皇派として奔走）させ、藩主を呼び戻すべく重臣を江戸へ差し向けます。そしてようやく藩主を説得し岩村に連れ戻して、朝廷に謝罪、勤王証書を提出することに成功します。あわせて江戸家老沢井市郎兵衛・秀造父子も召還護送し、藩主の去就を誤らせた罪を糾弾することになりました。しかし、沢井父子はその途中小田原で失踪し姿を隠してしまいます。そしてその後旧幕軍に加わり各地を転戦します。白河口の戦で父子は散り散りとなり、市郎兵衛は会津藩兵などと仙台まで落ち延びたが、秀造の死体を求めて引き返し、空しく横浜まで落ち延びたところ、無事横浜の縁者のところに身を寄せていた秀造と再会を果たしました。岩村藩では、沢井家を家名断絶の処分としたが、秀造は旧知の早矢仕有的とともに丸屋商社（丸善）を設立しました。早矢仕が病気を理由に岩村藩医を辞したのも、脱藩した沢井秀造と丸屋商社を設立したことを憚ってのことかもしれません。しかし、残念なことに秀造は翌明治3年結核のため早逝してしまいます。27歳の若さでした。父市郎兵衛はその後函館に渡り、その地で病没したと伝えられています。徳川家親藩の岩村松平家は、小藩ながら林大学頭や佐藤一斎などの名儒を出し、幕府の文教を支えた藩であり、長年の徳川家の恩顧に報いるためにも、薩摩・長州などに壟断された「官軍」に抵抗しようとする強い信念に支えられた生き方であったと思います。結果的に父子ともに数奇な生涯でありましたが……。　（こばやし おさむ　本学名誉教授）

Society 5.0を生き抜くための「実践力」
～メディア情報リテラシーの育成～

第2部門　兼務研究員
駒谷　真美

令和の現代は、Society 5.0（ICTを活用し多様な人々が想像と創造する社会）に向けて発展途上にある。Society 5.0では「IoT（Internet of Things）で全ての人とモノがつながり、新たな価値が誕生する」と期待されている。しかしながら、Society 5.0を担う次世代の大学生は、次の問題に直面している。

第一の問題は、情報に対して無防備なことである。マルチメディア世代の大学生は、スマホなどの最新デジタルメディアを難無く操作する一方、メディアを過信し騙されやすい傾向がある。メディアが伝える情報の真偽や偏見について吟味する視点が曖昧である。また、ツイッターやインスタグラムなどのSNSで個人情報やプライバシーを安易に公開している。ネットでは被害者にも加害者にもなってしまうという危機意識が希薄である。

第二の問題は、メディアが構成する「現実」に惑わされ、自分育てに長けていないことである。大学生の多くは、メディアが作り上げた「リア充」「意識高い系」学生像と実際の自分との乖離に悩んでいる。本学の学生たちも例外ではない。ソーシャルメディアを介したコミュニケーション（Social Media Communication）に偏向した脆弱な人間関係で、「実践女子大生である自分」を探しあぐねている。

そこで、実践女子大生がSociety 5.0を生き抜き主体的に活躍するには、「実践力」の基礎となる「メディア情報リテラシー」（MIL, Media and Information Literacy）が必要不可欠である。現在、駒谷が担当する講義や演習でPBLやアクティブラーニングの手法を用い、MIL育成の実践を行っている。具体的には、図1に示すように、「Step 1 基礎 メディアに対する抵抗力」では、情報の活用スキルを体得し、メディアの特性理解・メディア社会の知識・情報モラルを学習することで、批判的思考へと発展させ、MILのパーソナルな能力を育成している。続いて「Step 2 応用 未来の市民としての社会的なチカラ」では、ICTに振り回されるのではなく、主体的な使い手として、自分の考えを持ち、他者との共感性を高め、社会的グループで確実に発信できる表現力を培い、MILのソーシャルな能力を育成している。

このsmall stepの蓄積が、Society 5.0に飛び立つ実践女子大生の翼となり「実践力」を発揮できるgiant leapとなることを希求している。

（こまや まみ　大学・人間社会学科 教授）

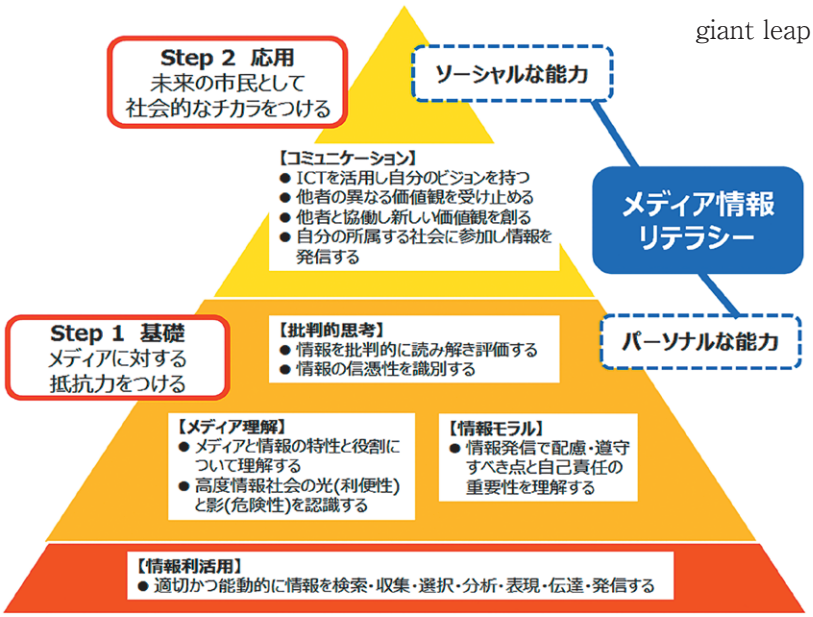


図1　「MIL育成」フレームワーク
（© 2016、駒谷真美）

EUのメディアリテラシー評価基準（Tornero & Pi、2013）・情報リテラシーのガイドライン（私立大学情報教育協会、2012）・情報活用の実践力（永野ら、2001）の観点を加え、駒谷が構築

実践桜会秋季運営委員会講演会「下田先生再入門」について

第1部門長　兼務研究員
髙瀬　真理子

実践桜会からご依頼をいただき、講演させていただきました。運営委員である卒業生のみなさまも、下田先生について学内では多くを語られないまま卒業し、改めて先生のことを知りたいとのことでした。私は板垣先生との出会いによって下田先生について調査し、考察する機会に恵まれ、その後を託されながらも、おめおめと動けないままになっていました。みなさまに感謝しながら、現状を見渡してお話しさせていただきました。

髙瀬真理子先生の講演会「下田先生再入門」を拝聴して　片山久子

2019年10月5日実践桜会会館に於いて秋季運営委員会の特別講演に髙瀬教授をお招きし、昨今学祖顕彰の進む下田歌子先生についてのお話しを興味深く拝聴いたしました。

20年以上前になりますが、当時の短期大学教授でいらした板垣弘子先生の冊子文に垣間見る、まだ顕彰が進んでいなかった時代に、下田歌子の全体像を明らかにしたいという思いに相通じるものがあると考え、ここでその1997年当時の板垣弘子教授（故人）の一文から、一部を省略し抜粋致します。「これまでの歌子は、宮中での若き女官時代さらにはその女官時代に知遇を得た政府高官にまつわるエピソード等で物語の素材として扱われたことが多かった。一方で『下田歌子先生傳』等の伝記類は、資料としても客観的というより礼讃の対象としての捉え方で歌子の正当な評価とは言い難い。もっとも広く知られているのは実践女子学園の創設に代表される教育者としての顔である。」(注) と書かれています。

髙瀬教授の講演に戻ります。年譜上のトピックに沿ってわかり易い時代の説明と共に、今回髙瀬教授が示されたのが立体的な視点でした。すなわち、周辺から見た下田歌子の立ち位置を、伊藤博文との関わりなど政治的な側面であったり、津田梅子研究から見えてくる客観的な評価や意見などから考察していくものです。女子教育者としてだけではなく、女性としてあの男尊女卑時代を長年にわたり生き抜いた人間としての重みを考えさせられました。

参考文献としてとりあげられた原武史著『皇后考』では、今まで考えてもみなかった、当時の皇后のあり方、ひいては皇后の人となりをあらためて知り、下田先生と美子皇后・節子皇后との関わり方を少し違った方向から見ていく、一つの入り口を示されました。

また、政治的に伊藤派として見られることもあり、その政治力学から抜けられず、女性の地位が低い時代ゆえに余計にバッシングの対象にもなり得た点、下田先生の関わった婦人会が戦争を経て誤解され話題に出しにくかった点など、これからの下田歌子研究にむけての課題もいくつか取り上げて、今後の研究に繋げるテーマを示されました。

前述の板垣先生の冊子でも、下田歌子は清国留学生の受け入れなどスケールの大きな教育者としてのイメージが先行し、宮中時代にのちの昭憲皇太后から歌才を賞でられ「歌子」の名を賜ったほどの歌人・国文学者としての影が薄い、と評しています。

髙瀬教授も、基本中の基本であるはずとして、下田歌子の和歌研究確立の必要性を述べられました。

私自身の在学中は、学祖であるはずの下田歌子先生について詳しく教わらなかった世代でしたので、顕彰が進み、歌人・国文学者としての研究への道筋も確立されることを期待したいと思っております。

（かたやま　ひさこ　昭和50年度 短大国文科卒）

講演風景

（注）『本のニュース』1997.10.25、日本図書センター

第２回　実践の現代史・ナラティヴ（語り）

戦後の実践の歩みを知るために、本研究所では卒業生や教職員に聞き取り調査を行っております。題して「実践の現代史・ナラティヴ（語り）」。卒業生や教職員の体験を伺うことで、実践の過去と今をつないでいきたいと思います。

第２回目は、大学事務部長、総務部長、常務理事等を歴任し、実践女子学園に44年間勤務された宮原幹二さんです。

■　宮原幹二氏　インタビュー

みやはら　かんじ
在任期間：1972年（昭和47）年１月～2016（平成28）年３月
経　　歴：1972年（昭和47）年１月～2009年（平成21）年３月　短期大学学務課、企画部企画広報課、大学事務部教務課、情報センター、総務部などを歴任。その後、2009（平成21）年４月～2016（平成28）年３月まで学園理事。

――実践に就職された時の経緯をお教えください。

実践女子学園に就職したのは、知人の紹介です。私は、國學院大學出身ですので、学生時代、いつも実践女子大学を斜めに見ながら大学に通っていました。その頃の「実践」と言えば、私にとって憧れの的でしたが、近くて遠い存在でした。

実践に就職する前、出版関連の企業におりました。ちょうど70年安保直後のころです。その会社は組合がかなり強く、連日、支援の外部の組合員が会社に押し寄せてきていました。そんな時に、実践女子大学の教務課で職員を募集していると知人から話があり、受けた次第です。試験は面接だけで、すぐに採用が決まりました。1月1日付採用でしたが、冬休み中ということで、1月10日から出勤したのを覚えています。当時は、各部署ごとの採用でした。ですから、現在のように人事異動がなかったんですね。

――そのころの学園の様子はいかがでしたか。

学生のころ、外から見ていた実践と実際に入職してからの実践とでは、かなりのギャップがありました。入職前は都会の女子大のイメージが強かったのですが、入職してみると、着物姿の年配の職員さんがいたのに驚きました。当時は70歳定年でしたのでそのような方もいらしたんですね。

私は、教務課で採用されたので、教務課に5年ほどおり、チャイムの管理を任されていました。チャイムの時間が1秒でも遅れると厳しい先生が文句を言いに事務室にいらしたので、振子機械式時計の調整にはかなり神経を使いました。また、碩学泰斗の先生が大勢いらして、先生の面前では緊張したものでした。

――日野キャンパスへの移転はどのようにして進んだのでしょうか。

私立大学への経常費補助金制度が確立したのは、1970（昭和45）年頃です。当時、短期大学は学生数が多く、敷地面積が基準を満たしていませんでした。そこで、設置基準を満たすため、当時、埼玉県松伏町にあった某女子短大の施設を譲り受け、短期大学の家政科家庭科学コースを新設しました。埼玉校舎は4年程使用した後、短期大学の渋谷から日野への全面移転に伴い、日野へ移転しました。

移転は2年間かけての年次進行でしたが、什器備品等の渋谷と埼玉からの移動は、教職員が主になって行いました。特に印象に残っているのは、ピアノを4階の教室へ階段を使って人力であげたことです。皆、若かったですね。機器備品他、荷物の移転は、ほとんど、教職員が行いました。

――渋谷の跡地利用について、どのような議論があったのですか。

私は1977（昭和52）年4月から短期大学に異動し

ましたが、当時短期大学は大変人気があり、中高から短大に進学する人もたくさんいました。しかし、近い将来、18歳人口が減り、本学も志願者が減少していくという危機感を教職員は持っていたと思います。

そのころ、「短期大学の将来を考える会」という有志の会が発足し、連日、業務終了後、話し合いをしました。その会で常に話題になっていたのが、渋谷の常磐寮の跡地を活用できないかということでした。学園には、「常磐寮跡地検討委員会」が発足しましたが、結局、常磐寮を中途半端に取り壊しただけでした。常磐寮の跡地の件は、その後もかなり検討されていたようですが、当時の理事会では、渋谷には移転しない方向で動いていたので、私も渋谷移転はもうないと思っておりました。

――下田先生についてはどのような思い出がありますか。

実践は素晴らしい学校なんだと実感したのは、実践に入職して間もないころでした。郷里（鹿児島）の母が上京した際に学内を案内したところ、母が正門の下田先生の銅像を見て、「どうして、ここに下田先生がいるのか？」と驚いていました。私が母になぜ下田先生を知っているのかと聞くと、明仁親王（現上皇陛下）が誕生なさった時に、下田先生が国民を代表してお祝いの言葉を述べられているんですね。当時の一般の人達には、その時の下田先生の印象が強く心に残っていたようです。母は私が下田先生の学校に勤務していることを大変喜んでおりました。

また、私が入職したころの入学式は、4月8日でした。これは、下田先生が東路之日記（焼失）の中に記されている岩村を出立された日だと聞いています。また、静岡市の西の旧東海道に宇津ノ谷峠があります。ここは、幕末のころまではかなりの難所でした。下田先生がこの峠を越えた時に詠まれた歌が碑になっていますが、これはあまり知られていないと思います。

私は、学園はあまり下田先生の顕彰をしてこなかったと思っています。1999年の創立100周年記念の時も、学園として下田先生の建学の「志」を再確認することができれば、もっとよかったのではないかと心残りがしています。しかし、創立100周年という節目に自分が在職していたことはとても僥倖でありました。

――常務理事時代で印象に残っていることは何でしょうか。

高橋理事長、井原理事長の時代は、学園がこれまで先送りにしてきた財政、中高・大学短大教育、老朽校舎、就業規則、助手副手などの諸問題に積極的に向き合った一大転換期でした。この二人の理事長は、柔軟な考え方で物事を進めていくという点で、今までにないタイプでした。

高橋理事長と井原理事長が下田先生の教育の理念を大事にしようという方針を打ち出してくださったので、今日の実践があるように思います。私は、常務理事時代、「下田先生がいらしたら、どうお考えになるか、下田先生にどう説明できるか」ということを念頭において、業務を遂行してきました。また、昭和20年代前半の戦後混乱期の学園の人々の苦労に比べれば、あの時の諸懸案は大したことはないとも思っていました。

――これからの実践に期待することはありますか。

当然のことですが、実践の教育・研究機関としての確実な歩みに期待します。また、私は在職中、施設設備関係の業務に長く携わってきましたので、実践はいつまでもきれいで品性のある学校であり続けてほしいと願っています。

聞き手：広井多鶴子 所　　長
　　久保　貴子 専任研究員
　　湯浅　茂雄 兼務研究員
日　時：2019年11月20日（水）16：30～18：30
場　所：大学 渋谷キャンパス
　　120周年記念館 17階会議室3

英文学科公開講座シンポジウム報告

第2部門 兼務研究員
志渡岡　理恵

2019年11月27日（水）、実践女子大学渋谷キャンパス805教室において、実践女子学園創立120周年記念英文学科公開講座「「動く」女性―日英米の女子教育と服装改革の歴史」が開催されました。このシンポジウムは、学祖・下田歌子の女子教育の構想の源となった19世紀後半の英米の女性解放運動のありようを振り返り、女子教育のありかたを再考する機会にしようと企画されたものです。講師は、英文学科の稲垣伸一教授、大関啓子教授、筆者（志渡岡理恵）と、人間社会学科の広井多鶴子教授（下田歌子記念女性総合研究所所長）の4名で、学部の枠を越えた学際的な議論の場となりました。

英文学科主任の佐々木真理教授から趣旨説明と講師紹介が行われた後、最初に稲垣教授より「19世紀アメリカの衣服改革―健康増進と女性解放」というテーマで、アメリカの服装改革と女性解放運動および健康増進運動との繋がりが説明されました。日本の女子体操着にもその名を残す「ブルーマー」を考案したAmelia Bloomerの話から始まり、National Women's Hall of Fameに展示されているコルセットの写真（稲垣教授撮影）や稀少な一次資料を駆使して展開される議論は、多くの聴衆の知的好奇心を刺激しました。

次に筆者が「合理服、スポーツ、自転車―19世紀イギリスの女性解放運動」というテーマで、イギリスの「ブルーマー」受容から合理服協会への流れと、女子の体育教育導入から自転車の流行に至るまでの経緯を話しました。そして、下田が帰国後、女子教育に体育を採り入れ、日本初の女子自転車倶楽部の会長に就任したのは、このような女性解放運動の成果に触発されたからだろうと述べました。

続いて広井教授より「女袴、制服、そしてブルマー―女子学生の服装の変化が意味するもの」というテーマで、日本の女性の衣服の変化には女性への文化的圧力がどのように関与しているか解説されました。洋装が制服や礼装として普及していく中で、「家庭」と結びつけられた主婦は長らく和装のままだったという指摘や、19世紀末から20世紀初頭の女子学生の貴重な写真は、日本女性が歩んできた歴史を新たな目で見直す機会を提供しました。

最後に大関教授より「実践のルーツを英国に追う」というテーマで、ケンブリッジ大学ニューナム・コレッジの女性の特性を活かした創設の主旨が、1895年下田が視察の対象に敢えて選んだ理由であり、その後の実践女学校創設にも活かされていると、指摘されました。また女子学生が学位取得を含むフル・メンバーシップを認められるまでの苦闘の歴史なども詳らかにされ、聴衆の方々は熱心に聞き入っていらっしゃいました。

下田歌子記念女性総合研究所の久保貴子研究員の尽力で、実践女子学園の制服なども展示され、充実したシンポジウムとなりました。ご参加くださった皆様に感謝申し上げます。

（しどおか りえ　大学・英文学科 准教授）

2019年度 活動報告

研　究　会

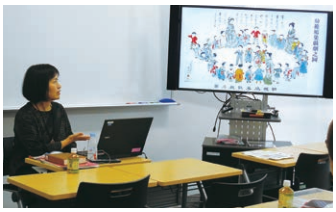
■ 第1部門

第1回研究会

9月4日（水）13：00～17：00　日野キャンパス本館348教室

主なテーマ：「下田歌子先生の年譜について」「今年度購入資料について」等

■ 第2部門



1 第1回研究会

6月5日（水）16：45～18：15　渋谷キャンパス506教室

研究発表：志渡岡理恵兼務研究員、松田純子兼務研究員

2 第2回研究会

7月17日（水）16：45～18：15　渋谷キャンパス506教室

研究発表：広井多鶴子所長、村上まどか兼務研究員

講　演　会

■ 社会人トーク

1 第1回　12月17日（火）　10：45～12：15　日野キャンパスⅤ531教室

講師：三輪英子氏　株式会社 wiwiw 執行役員

「現代の企業のワークライフバランス意識の動向とこれからの女性の生き方」

2 第2回　2020年1月15日（水）　17：00～18：00　日野キャンパスⅢ321教室

講師：地下有可里氏　日野市健康福祉部高齢福祉課在宅サービス係・係長

「私のキャリアを振り返って」

3 第3回　2020年1月22日（水）　18：30～　日野キャンパスⅢ321教室

講師：八瀬邉真子氏　株式会社 JAL スカイ

「空港関係業務について」

自校教育など

■ 実践女子学園新採用教職員研修会

講師：久保貴子専任研究員

3月26日（火）　日野キャンパスⅣ433教室、　4月10日（水）　日野キャンパス香雪記念館203教室

■ 実践入門セミナー

講師：久保貴子専任研究員

4月18日（木）　生活文化学科　日野キャンパスⅣ411教室

5月10日（金）　食生活科学科　日野キャンパス香雪記念館101教室

■ 創立120周年記念式典記者会見

山本章正理事長、難波雅紀副学長、広井多鶴子所長

5月6日（月）　岐阜県恵那市岩村山荘

■ 創立120周年記念記者懇談会

広井多鶴子所長、久保貴子専任研究員

5月10日（金）　渋谷キャンパス　プレゼンテーションルーム

■ 夏季セミナー「学長と行く、学祖故郷の旅　～がくたび～」（9月11日～13日）

講　師：久保貴子専任研究員

テーマ：「下田歌子の『和文教科書』」

9月11日（水）　岐阜県恵那市　岩村山荘

出　版　事　業

■ 新編下田歌子著作集　『良妻と賢母』刊行

現在絶版となっている下田歌子の著作から、現代社会・女子教育に資することが大きいと考えられる作品を『新編下田歌子著作集』として復刊しています。
今年度は第5巻目として、女性の生き方と真摯に向きあった下田歌子の代表的な著作『良妻と賢母』（1912年富山房）を刊行します（久保貴子校注）。

学園資料の展示など

■ 常磐祭

1 日野キャンパス

11月9日（土）10日（日）本館362教室　来場者：546名
学祖下田歌子旧蔵の裳などの女房装束や卒業アルバムの公開展示

2 渋谷キャンパス

11月23日（土）24日（日）703教室　来場者：393名
本学園中学校高等学校所蔵の1923～1939年の制服や卒業アルバムの公開展示

■ 学祖ご命日展示

10月1日（火）～10月8日（火）日野キャンパス本館1階

■ 下田歌子賞表彰式

12月14日（土）　岐阜県恵那市岩村町　岩村コミュニティセンター
今年で17回目（テーマ「志」）を迎えた下田歌子賞表彰式にて特別展示

共催・後援事業

■ 実践女子学園創立120周年記念生活科学部公開講座
「『これからの暮らし』の創造―実践女子大学における家政学の創生とこれからの生活科学」

11月2日（土）13:20～15:40　日野キャンパス本館1階　キャンパススクエア
講師：牛腸ヒロミ（生活科学部長）　大久保洋子（本学元生活科学部教授）
西田　司（東京理科大学准教授）　近藤　幹生（白梅学園大学･白梅学園短期大学学長）

■ 実践女子大学プロジェクト研究所「数的能力・リテラシー育成研究所」主催
研究成果公開促進費助成事業「国際シンポジウム」

International Conference on Financial Literacy: Exploring the Japanese Style of Education for Financial Literacy

12月1日（日）9:30～16:00　渋谷キャンパス503教室
講師：William B. Walstad 氏（ネブラスカ大学リンカーン校教授）
山岡　道男（早稲田大学名誉教授）　栗原　久（東洋大学教授）
阿部信太郎（城西国際大学教授）　髙橋　桂子（本学生活科学部教授）
猪瀬　武則（日本体育大学教授）　山根　栄次（三重大学名誉教授）

協力事業（展示）

■ 嚶鳴広場特別展示ふるさと先人展「下田歌子と佐藤一斎」

7月26日（金）～8月18日（日）
愛知県東海市　芸術劇場・嚶鳴広場

■「近江商人の里の女子教育―下田歌子から塚本さとへ―」

9月21日（土）～12月1日（日）
滋賀県東近江市　近江商人博物館・中路融人記念館

■「はいからモダン袴スタイル展」

2020年1月7日（火）～3月29日（日）
東京都文京区　竹久夢二美術館

『ニューズレター』No.14
発行：2020年2月7日　編集・発行所：実践女子大学 下田歌子記念女性総合研究所
〒191-8510　東京都日野市大坂上4-1-1　電話・FAX: 042-585-8945　E-mail:shimoda-ins@jissen.ac.jp
印刷：日野テクニカルサービス株式会社